

4. 着地不安から見えてくるもの

4.1 着地不安スコアを被説明変数とする重回帰分析

ここまでみてきたように、高校生の着地不安は、若者に特徴的な意識や周囲との人間関係、勉強に対する認識といった要因が複雑に絡み合っている。しかも、これらの要因の分布そのものもまた、性別・学校ランク・進路によって異なっている。こうした複雑に絡み合ったメカニズムを可視化するためには多変量解析をもちいた分析が有効である。

各変数の関係を明らかにするために、ここでは重回帰分析をおこなうことにしよう。説明変数としては、ここまでで検討してきた変数のうち、2.1 でみた意識に関する変数を除いた変数をもちいる。

重回帰分析の結果を示した表3から、まず、直接的な効果をもたない変数を確認しておきたい。高校での成績、教師からの期待、親からの期待、勉強は就職に役立つ、の4変数である。それ以外の変数は、他の変数をコントロールしても直接的な効果をもつことがわかる。

表3 重回帰分析の結果

説明変数		B	β
性別	男性ダミー (基準:女性)	0.132	0.025+
学科	普通科上位校ダミー	0.128	0.024+
	専門学科ダミー (基準:普通科中位・総合)	-0.195	-0.031*
成績	高校での成績	-0.012	-0.006
進路	進学ダミー	-0.557	-0.098***
	就職ダミー (基準:未定その他)	-0.723	-0.110***
人間関係	教師からの期待	-0.032	-0.011
	親からの期待	0.031	0.011
	友人から悩み事	-0.242	-0.078***
勉強	授業は面白い	-0.130	-0.040**
	勉強は就職に役立つ	0.038	0.013
定数		11.053	
R2乗=0.017 F値:10.644(p<0.001)			

*** : p<0.001 ** : p<0.01 * : p<0.05 + : p<0.10

普通科上位校は着地不安をやや増加させるのに対し、専門学科は逆に低下させる。進学にせよ就職にせよ、進路が決定していることは着地不安を低下させている。また、これらの環境要因を制御してもなお、友人から悩み事を打ち明けられる存在であることや、授業内容が面白いと感じていることは有意に着地不安を低下させていることが、ここからも確認できる。

4.2 大人の期待がもつ効果

3.1 および 4.1 でみたように、友人との関係や授業の面白さが着地不安を直接的に軽減させる効果をもつものに対して、教師や親からの期待には着地不安に対する直接的な効果をもたなかった。それでは、周囲の大人との人間関係は、社会に出て行こうとする若者たちにとって何の意味ももたないのだろうか。

教師や親の期待には、実は、間接的な効果が存在する。それによって着地不安を軽減させている可能性が存在する。それは、「自己無能感」に対する効果である。

「自己無能感」を被説明変数とし、説明変数として人間関係と成績を投入した重回帰分析の結果を表4に示した。統計的に有意であるか否かは別にしても、これらの変数が「自己無能感」

と負の関係、すなわち低下させる方向にあることがわかる。

男女計でみると、統計的に有意な説明変数は教師からの期待と友人からの悩み事の2変数で、教師から期待されていると思うほど、また友人から悩み事を打ち明けられるほど、「自己無能感」が低くなっている。けれども、このメカニズムは男女によって大きく異なっている。男性の場合は教師からの期待は有意ではなく、親からの期待が10%水準ではあるが有意となっている。また成績上位者ほど「自己無能感」が低くなる傾向にある。それに対して、女性では教師からの期待が有意で親からの期待は有意ではない。また、成績も有意ではない。男性と女性とを比較すると、女性の「自己無能感」のほうが人間関係に依存しているということができよう。

性別によって、教師からの期待か親からの期待かという違いはあるが、大人から期待されるということは、若者が「自分には何のとりえもない」という「自己無能感」を感じる程度を引き下げる効果をもつ。着地不安そのものに働きかけることはできなくとも、着地不安を大きく規定する自己無能感を低下させることを通じて、間接的に着地不安を軽減させることができるのではないだろうか。

表4 「自己無能感」の重回帰分析

説明変数	男女計		男性		女性	
	B	β	B	β	B	β
教師からの期待	-0.066	-0.066***	-0.025	-0.025	-0.097	-0.096***
親からの期待	-0.021	-0.022	-0.035	-0.036+	-0.004	-0.004
友人から悩み事	-0.055	-0.053***	-0.09	-0.084***	-0.106	-0.093***
高校での成績	-0.012	-0.017	-0.028	-0.040*	-0.004	-0.005
定数	2.874		2.851		3.104	
	R2乗=0.011 p<0.001		R2乗=0.013 p<0.001		R2乗=0.020 p<0.001	

5. まとめにかえて

以上、若者の着地不安に着目して、高校卒業生のデータをもちいて分析してきた。本稿でのおもな知見は、以下の3点である。

1. 現代の若者に特徴的であると指摘されている「自己無能感」「やりたいこと志向」「現在志向」のいずれもが着地不安と深く結びついている。
2. 着地不安と人間関係との関連から、友人から悩みを打ち明けられるタイプであることや、高校生活との関連では、授業内容が面白く思えると着地不安が低くなる傾向がみられた。
3. 教師が生徒に示す期待を高めることが直接的に着地不安を軽減させるわけではない。しかし、教師による期待は、生徒の自己無能感を低下させ、さらには授業を面白いと感じさせることを通じて、着地不安を間接的に軽減する可能性がある。

現代の社会においては、青少年は豊かさのなかで育てられ、現在が楽しいというのは当然の前提となっている。その現在からみれば、将来は不透明であるだけでなく、働かなくてはならないというだけでもネガティブに見えるのではないだろうか。こうした状況下では、着地不安を抱くことは、多くの高校生にとってむしろ当たり前の現実である。

若者が社会に出ることを促すためには、きちんと就職しなければ将来大変なことになるという危機感を与えるだけでは不十分である。現行の若年者雇用支援の一環としておこなわれている就職観の育成方策が、危機感を煽るだけのものになっていないか、評価する必要はある。若い時期に乗り越えるべき困難を与え、期待を伴う視線と行動によって「自己無能感」を募らせ

ないようにすること、将来に対してポジティブなイメージを持つことができるようにすることもまた、大人たちが心がけなければならないことである。

それとともに、友だちと悩みを打ち明けあい、授業内容を面白いと思えるような高校生活を送ることができるようにすることが、着地不安の軽減には重要である。そのために、自分の意見を明確に表明することができる一方で、現状に自己満足することなく目標と現実とのギャップのなかで柔軟に対応できる力を、キャリア教育を通じて涵養することが、相談される人材の育成には求められる。また上位校への進学や成績向上を優先する教育内容よりも、生徒の基本的な公共心を高める教育、さらには生徒に自分への期待を感じさせる教師の態度そのものが、授業を面白いと感じさせる教育に結びついていることを忘れてはならない。

本稿での考察をさらに進めれば、充実した高校生活を送ったと思うことができれば安心して次のステップに進むことができるという可能性が示唆される。就業支援というと、学校から労働市場への接続部分であるトランジションの側面ばかりが注目され、職業紹介システムや、うえでふれた職業観の育成、学校教育と職業とのレリバンスの強化ばかりが重視されがちである。しかしながら、就業の遅延が着地不安に起因しているとすれば、友人や教師との信頼関係をベースに充実した学校生活を、すべての高校生に構築することが、何よりも優先されるべきなのではないだろうか。そのための具体的な支援策について、今後引き続き検討していくべきであろう。

【注】

- 1) 斎藤自身は「自己無能感」ではなく『負けた教』の信者」といった表現をしているが、その意味するところは、荻谷（2001）の「自己有能感」と対照的だと考えられるため、ここでは「自己無能感」とよぶ。
- 2) 「自由」に関する意識は重要であるが、調査票では、これに対応する質問をしていないため、ここでは分析の対象としない。「自己有能感」についても、対応する質問項目がないため、「自己無能感」をもちいることとする。
- 3) 「自己無能感」の指標としてもちいる「自分には何のとりえもないと感じる」の単純集計結果は、「とてもあてはまる」13.2%、「ややあてはまる」35.8%、「あまりあてはまらない」37.9%、「あてはまらない」13.2%である。また、「やりたいこと志向」の指標としてもちいる「若いうちはやりたくない仕事にはつきたくない」の回答結果は、「とてもあてはまる」19.9%、「ややあてはまる」35.8%、「あまりあてはまらない」35.8%、「あてはまらない」8.5%となっている。
- 4) 自己評価による高校の成績と「自己無能感」との関連性は χ^2 検定により0.1%水準で有意であるが、「とてもあてはまる」とする比率は、成績「上のほう」で11.9%、「中の上」で12.0%、「真ん中ぐらい」12.1%、「中の下」13.5%、「下のほう」17.3%となっており、それほど大きな違いはない。とくに、「下のほう」を除いた4グループでは、ほとんど差がないといえる。
- 5) この学校ランクは、調査対象校の学科や進学率にもとづいて、学科単位で設定したものである。
①普通科（理数科を含む）で現役四年制大学進学（希望者）率が40%以上の学科、②普通科（理数科を含む）で現役四年制大学進学（希望者）率が40%未満の学科および総合学科、③専門学科、の3つに分類されている。詳しくは、元治・鶴田・長尾・朴澤（2005）を参照のこと。
- 6) 調査では、進路について、就職先および進学先の決定／未決定の別も含めて詳しく尋ねているが、

ここでは〔就職〕〔進学（進学先未決定を含む）〕〔未定等〕の3つに分類した。それぞれの構成比は、18.7%、71.0%、10.3%である。

- 7) それぞれの単純集計結果をみると、教師の期待が「とてもあてはまる」7.8%、「ややあてはまる」30.2%、「あまりあてはまらない」40.5%、「まったくあてはまらない」21.4%、親の期待は「とてもあてはまる」19.7%、「ややあてはまる」42.8%、「あまりあてはまらない」24.2%、「まったくあてはまらない」11.1%となっている。
- 8) ただし、「先生は私が高校でがんばることを期待している」に対する回答のうち「とてもあてはまる」「ややあてはまる」に限定して分散分析をおこなえば、5%水準で有意であった。
- 9) 「友だちから悩み事を打ち明けられることが多い」に対する回答の単純集計結果は、「とてもあてはまる」13.5%、「ややあてはまる」37.9%、「あまりあてはまらない」39.3%、「まったくあてはまらない」9.3%である。
- 10) 着地不安との関連性は、どちらの変数も分散分析により1%水準で統計的に有意であった。また、各回答の分布は以下のとおりである「高校での勉強は将来、就職する際に重要だ」:「とてもあてはまる」17.3%、「ややあてはまる」47.0%、「あまりあてはまらない」28.9%、「まったくあてはまらない」6.8%、「授業内容は面白い」:「とてもあてはまる」3.0%、「ややあてはまる」47.0%、「あまりあてはまらない」28.9%、「まったくあてはまらない」6.8%。

【参考文献】

- 岩見和彦, 2005, 「現代社会と後期青年期問題」『教育社会学研究』第76集
- 香山リカ, 2004, 『就職がこわい』講談社
- 荻谷剛彦, 2001, 『階層化日本と教育危機』有信堂
- 小杉礼子(編), 2002, 『自由の代償／フリーター 現代若者の就業意識と行動』日本労働研究機構
- 小杉礼子, 2003, 『フリーターという生き方』勁草書房
- 玄田有史, 2001, 『仕事のなかの曖昧な不安』中央公論新社
- 玄田有史・曲沼美恵, 2004, 『ニート フリーターでも失業者でもなく』幻冬舎
- 元治恵子・鶴田典子・長尾由希子・朴澤泰男, 2005, 「高校生の進路選択と意識に関する実証研究(2)」『日本教育社会学会第57回大会 発表要旨集録』(2005年9月17日・18日 放送大学) pp. 279-284
- 耳塚寛明(編), 2000, 『高卒無業者の教育社会学的研究』お茶の水女子大学文教育学部
- (編), 2003, 『高卒無業者の教育社会学的研究(2)』お茶の水女子大学文教育学部
- 宮本みち子, 2002, 『若者が《社会的弱者》に転落する』洋泉社
- 大久保幸夫, 2002, 『新卒無業』東洋経済
- 斎藤 環, 2005, 『「負けた」教の信者たち』中央公論新社
- 下村英雄, 2002, 「フリーターの職業意識とその形成過程—「やりたいこと」志向の虚実」小杉編, 2002 『自由の代償／フリーター 現代若者の就業意識と行動』第4章所収
- 粒来 香, 1997, 「高卒無業者層の研究」『教育社会学研究』第61集
- 山田昌弘, 1999, 『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房
- , 2004, 『希望格差社会』筑摩書房

進路意識の変化とその規定要因

元治恵子

(東京大学社会科学研究所)

本稿の目的は、高校3年生の時点と卒業1後年の時点で実施したパネル調査と保護者調査のデータを使用し、「働く」ことや将来に対する意識（進路意識）がどのように変化したのか／しないのか、また、その変化／無変化の背景にはどのような要因があるのかを明らかにすることである。卒業後1年経った時点の方が、むしろ進路意識が不明確化する傾向が見られた。男女での違いは見られないものの、就職している者でその傾向は顕著であり、進学した者でも、大学へ進学した者の方が進路意識が不明確化していた。一方で、短大へ進学した者では、意識が明確化している傾向が見られた。重回帰分析の結果から、「短大に在学していること」や「家族とのコミュニケーション」は、進路意識の不明確化と負の、また、「現在志向」は正の関連があることが明らかになった。

1. はじめに

1990年代の初めには、長期的な労働力不足への懸念、バブル経済などを背景とする若年者の労働力不足による新規学卒者の売り手市場であった。しかし、その後の景気後退とともに、企業の新規学卒者の採用意欲は減退し、全体的な完全失業率の上昇のなかでも、とくに若年層の完全失業率が高い水準を示していた。学校卒業時点で職に就けない無業者、アルバイトやパートなど非正規の形態で働いているフリーター、そして、通学もせず、就業もしていないニートなど、若年層をめぐる就業問題に社会的な関心が集まり、その実態に関する調査や研究が行われてきた。これらの研究では、景気の後退などの循環的要因や産業構造や労働市場の構造的要因など、若者本人の力では如何ともしがたい要因の影響が指摘されている（玄田 2001, 原 2005, 筒井 2005）。また、その一方で、若者の職業意識の未成熟や変化、そして、主体性の欠如など、若者自身の「意識」や態度がその背景にあるという指摘もある（安達 2004, 下村 2002, 2003）⁽¹⁾。安達（2004）も指摘しているように、双方の立場は、二者択一的なものではなく、相互に絡み合い、問題を深刻化させているといえよう。そして、これらの研究成果を元に、行政、企業、教育訓練機関の連携による若年就業支援策など政策的対応が図られては始めている（小杉 2004, 佐藤・高橋 2005 など）。

一方、仕事の世界（社会）へ若者を送り出す側の学校教育の方へ目を向けると、少子化により、以前に比べ高等教育への進学が容易なっており（耳塚 2000）、さまざまな入試方法が実施されたり、専門学校・各種学校への進学者が増加するなど高校卒業後の進学は多様化している。そして進学後の状況にも変化が見られる。たとえば、従来、大学は、教養教育と専門教育、そして、専門職業教育の場とされてきたが、最近では、インターンシップ制の導入やキャリア教育、職業教育の重要性が言われ（天野 2005）、大学側もさまざまなメニューを取り揃え始めている。

このような状況を背景に、若者たちは進路について、どのようにとらえているのだろうか。若者の就業問題への心理的側面からの研究では、「適職信仰」「受身」「やりたいこと志向」が、彼らに特徴的なキャリア意識として指摘されている（安達 2004）。研究の多くは、一時点での

調査結果を分析したもので、若者の意識の変化やその形成過程を明らかにしたものは必ずしも多くない。高校を卒業し、ある者は就職、そして、ある者は進学と多様な進路に進む。自らの進んだ先での経験は、高校時代に描いていた「働く」ことや将来に対する意識にさまざまな影響を及ぼすだろう。本稿は、高校3年生の時点と卒業1年後の時点で調査を実施したパネル調査のデータを使用し、進路に関する意識がどのように変化したのか／しないのか、また、その変化／無変化の背景にはどのような要因があるのかを明らかにすることを目的とする。

2. データ

分析には、2004年1月に実施した『高校生の生活と進路に関するアンケート（以下「高校生調査」）』、2004年10月に実施した追跡調査である『高校卒業後の生活と意識に関するアンケート<調査票A：高校卒業後、職業についてたことのある方用>（以下「第1次追跡調査」）』、『高校卒業後の生活と意識に関するアンケート<調査票B：高校卒業後、職業についてたことのない方用>（以下「第1次追跡調査」）』、『高校卒業後の生活と意識に関するアンケート<保護者用>（以下「保護者調査」）』のデータを用いる。具体的には、高校卒業後1年目の者は、職業についてたことがあるかないかによって、A、Bのいずれか一方に回答することになっており、高校生調査、第1次追跡調査、保護者調査の3種類の調査への回答がそろっている433人（組）のデータを分析の対象とする。

3. 分析

3.1 進路に関する意識

前述の3つの調査では共通に、自分自身（保護者の場合は自分の子どもについて）の能力や資質、進路（キャリア）に関する意識19項目を、それぞれについて、「とてもあてはまる」「あてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4段階でたずねている。これらの質問項目のうち進路に関する意識⁽²⁾である①「どんな仕事をしたいのかよくわからない」②「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」③「自分の進路について今も悩んでいる」④「自分には10年後の目標がある」の4項目の質問⁽³⁾に対する回答を中心に見ていくことにする。ただし、分析では、質問に対し、「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答した者を『あてはまる』に、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答した者を『あてはまらない』に再分類したデータを利用した。

はじめに、各項目に対する回答の分布を確認しよう。図1は、高校生調査（＝高校生）、第1次追跡調査（＝卒後1年目）、保護者調査（＝保護者）で『あてはまる』と回答した人の割合を示したものである。まず、高校生と卒後1年目に注目すると、「どんな仕事をしたいのかわからない」と「自分の進路に今も悩んでいる」で『あてはまる』と回答した人の割合が増えていることがわかる。とくに「自分の進路に今も悩んでいる」は、37%から57%と20ポイントも増加している。一方「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」と「10年後の目標がある」の2項目では、『あてはまる』とした人の割合は、若干であるが減少している。これらのことから、自分の希望する（満足する）進路であったかはわからないが、高校を卒業し、いったん決めた進路に舵取りをし、進んだものの、自分のやりたい仕事を早くしぼらなければならないと思いつつもどんな仕事をしたいか、10年後にどのようななりたいか明確でなく、結果として、自分の進路について悩んでいるという、迷える若者像が浮かび上がってくる。

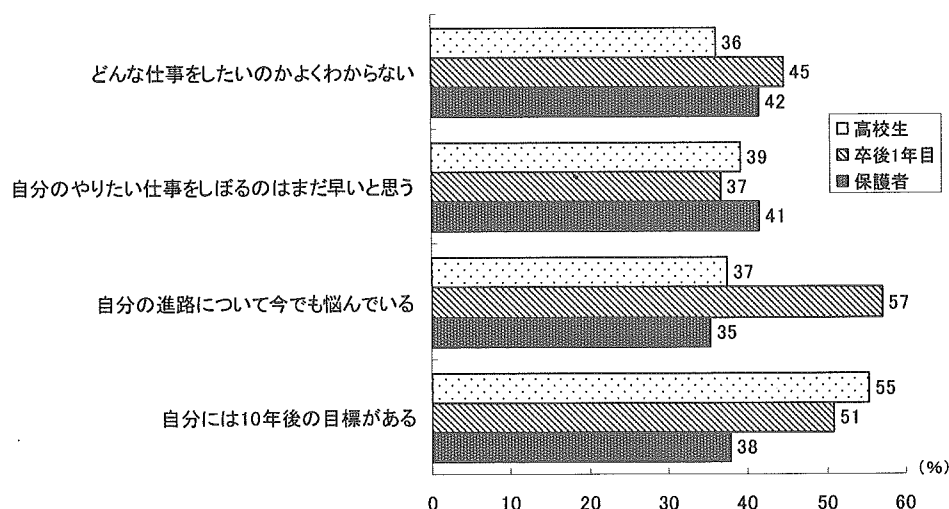


図1 高校生、卒後1年目と保護者の進路意識（『あてはまる』と回答した人の割合）
（保護者の場合は、自分の子どもにあてはまるかどうかに対する回答）

次に、卒後1年目と保護者の回答に注目してみよう。高校卒業後、就職あるいは進学した子どもをどのように保護者は見ているのだろうか。「自分の仕事をしぼるのはまだ早いと思う」以外の項目で、保護者の方が卒後1年目の本人よりも『あてはまる』と回答している割合が少ない。とくに、「自分の進路について悩んでいる」では、22ポイントの開きがあり、子どもが進路について悩んでいると思っている（気付いている）保護者は少ないことがうかがえる。また、「自分には10年後の目標がある」では、13ポイントの開きがあり、子どもが考えていることが親には伝わっていない可能性が示唆される。進路をめぐる親子の微妙な関係が浮かび上がっているのかもしれない。

3.2 進路に関する意識の変化

前節では、全体的な傾向として、高校生の時点と卒後1年目では、進路に関する意識の違いが見られたり、親子での認識の違いが確認できたが、もう少し詳細に見ていこう。本節では、高校生の時点と卒後1年目の間の意識の変化を見ていくことにする（表1）。

項目によって若干の違いはあるが、6割から7割の人では、進路意識に変化が見られない。しかし、逆に見れば、3割から4割の人では、1年間で進路意識に変化が見られるのだ。これを多いととらえるか少ないととらえるかの判断はできないが、変化した人々がいることは事実である。

では、その変化した人々はどうように変化したのかを項目ごとに見ていくことにしよう。まず、「どんな仕事をしたいのかわからない」では、『あてはまる（わからない）』から『あてはまらない（わかる⁽⁴⁾）』に変化した人は10.9%、『あてはまらない（わかる）』から『あてはまる（わからない）』変化した人は18.7%である。したい仕事が明確になった人よりも、わからなくなった人の方が多くことがわかる。2番目に「仕事をしぼるのはまだ早いと思う」を見ると、『あてはまる（早いと思う）』から『あてはまらない（早いと思わない）』に変化した人は19.0%、『あてはまらない（早いと思わない）』から『あてはまる（早いと思う）』変化した人は15.4%と、仕事をしぼることを早いと考えるようになった人よりも考えなくなった人の方が多。高

校卒業後進学した者でも、加齢とともに、学校から職業へと移行する時期が近づく。このことの影響があるのかもしれない。

3番目に「自分の進路について悩んでいる」を見ると、『あてはまる（悩んでいる）』から『あてはまらない（悩んでいない）』に変化した人は9.0%、『あてはまらない（悩んでいない）』から『あてはまる（悩んでいる）』変化した人は28.3%と、高校時点では悩んでいなかったのに、卒業後1年近く経ち悩んでいる人の増加が顕著である。ここでは、詳細な分析はできないが、高校を卒業し、新たな進路でこれまでとは違った経験をし、あらためて自分自身の進路を考えたとき、これで良かったのかどうか、今後どうしたらよいのだろうか悩み始めたということなのだろうか。

最後に「自分には10年後の目標がある」の項目では、『あてはまる（目標がある）』から『あてはまらない（目標がない）』に変化した人は15.2%、『あてはまらない（目標がない）』から『あてはまる（目標がある）』変化した人は11.1%と、懐いていた目標が、喪失してしまった人の方が多い。以上のことから、高校時代に比べ、就きたい仕事を見極める必要性を認識する人が増えたが、どんな仕事がしたいかがわからなくなったり、進路について悩む人が増加したり、そして、10年後の目標までもが描けなくなってしまった人が増えたということがいえるのではないだろうか。

表1 進路に関する意識の変化

		↓ 『あてはまる』 『あてはまらない』	変化なし	『（変化なしのうち あてはまる』 ～	『（変化なしのうち あてはまらない』 ～	↓ 『あてはまらない』 『あてはまる』	合計
どんな仕事がしたいのかよくわからない	度数	46	298	(109)	(189)	79	423
	%	10.9	70.4			18.7	100.0
仕事をしぼるのはまだ早いと思う	度数	80	277	(88)	(189)	65	422
	%	19.0	65.6			15.4	100.0
自分の進路について今でも悩んでいる	度数	38	266	(121)	(145)	120	424
	%	9.0	62.7			28.3	100.0
自分には10年後の目標がある	度数	64	311	(169)	(142)	47	422
	%	15.2	73.7			11.1	100.0

3.3 進路に関する意識の総合指標の操作化

前節までの分析では4つの項目それぞれについて見てきたが、進路に関する意識としての4つの項目はそれぞれが独立しているわけではない。それぞれが複雑に作用し、人々の意識を形作っていると考えられる⁽⁵⁾。「仕事をしぼるのはまだ早いと思う」と考えることは、進路に関する決定を先延ばしにすることであり、自分への猶予を与えていると考えられ、結果として、進路意識が不明確になることにつながるだろう。また、「どんな仕事がしたいのかよくわからない」と「自分の進路について悩んでいる」の2項目は、進路意識が不明確であることそのものにとらえることができる。そして、進路意識が不明確であるがゆえに、将来展望として

の10年後の目標が描けないことにつながるだろう。そこで、これらの4項目を「進路意識不明確」という観点からとらえ、ここで新たな指標を導入したい。項目ごとに、高校調査で『あてはまる』と回答し、第1次追跡調査で『あてはまらない』と回答した『あてはまる』→『あてはまらない』に変化した人には-1、高校調査で『あてはまらない』と回答し、第1次追跡調査で『あてはまる』と回答した『あてはまらない』→『あてはまる』に変化した人には1、変化がなかった人には0のスコアを与え、新たに(4つの)変数を作成した。ただし、「10年後の目標がある」という項目は、高校調査で『あてはまる』と回答し、第1次追跡調査で『あてはまらない』と回答した『あてはまる』→『あてはまらない』に変化した人には1、高校調査で『あてはまらない』と回答し、第1次追跡調査で『あてはまる』と回答した『あてはまらない』→『あてはまる』に変化した人には-1、変化がなかった人には、0のスコアを与えた⁽⁶⁾。

その後、この4つの変数のスコアを合計し、「進路意識不明確化スコア」を算出した⁽⁷⁾。以下では、この指標に基づき分析を進める。表2は、進路意識不明確化スコアの分布を示したものである。進路意識が不明確化した者は39.2% (24.0+8.8+4.5+1.9)、明確化した者は27.6% (0.5+0.7+5.7+20.7)、変わらない者は33.1%と、不明確化した者がもっとも多い。また、平均値は、0.27である⁽⁸⁾。

表2 進路意識不明確化スコアの分布

スコア	度数	%
-4	2	0.5
-3	3	0.7
-2	24	5.7
-1	87	20.7
0	139	33.1
1	101	24.0
2	37	8.8
3	19	4.5
4	8	1.9
合計	420	100.0

3.4 進路意識不明確化の規定要因

それでは、なぜ、高校在学中に比べ、高校卒業後1年経った時点では進路に関する意識が不明確化するような状況になるのだろうか。重回帰分析を用い、進路意識の変化を規定する要因を明らかにしたい。

3.4.1 分析に使用する変数

前節までの分析から、高校時点と卒業後1年目では、進路に関する意識の分布に違いが見られた。また、変化した後の状況を、親は必ずしも把握しているとはいえない状況にある様子が見えられた。そして、卒業後1年の間に、進路に関する意識に変化が見られ、それは、意識が明確化するというよりも、むしろ、不明確化する傾向が見られた。それでは、このような変化が生じた要因は何なのだろうか。進路意識はさまざまな要因が複雑に絡み合って形成されると考えられる。家族や友人など身近な人々の行動や意識に影響を受ける場合もあるだろう。また、働いているのか、通学しているのかによっても違ったものとなってくるのではないかと考えられる。進学した者は、社会に出て働くことが一時棚上げされた状態にあり、進路決定への猶予期間を過ごしていると見なすこともできる。このことは、働いている者に比べ、進路に迷いが生じやすいかもしれない。また、進学した学校によっても働くことへの動機付け(キャリア教育やインターンシップの導入など学校側の働きかけ)が異なる可能性もある。働いている者、進学した者については進学した学校の種類別に、意識の変化に違いがあるのかを確認しておこう。表3は、現在(第1次追跡調査時点)の状況別に進路意識不明確化スコアの平均値を示したものである。

現在の状況によって進路意識不明確化スコアには、有意な差が見られる（5%水準）。予想に反して、在職者が0.48と最も高くなっており、働くことにより、働くことや将来に対する意識が明確になるのではなく、逆に迷いなどが生じている。このことは、高卒就職者のおかれている状況などの影響もあるのかもしれない。また、進学した者に関しては、4年制大学が最も高く、ついで、専門・各種学校・職業訓練校、短大の順になっている。短大の場合マイナスの値であり、全体的な傾向として、明確化した様子がうかがえる。また、浪人生に関しては、0.06とほとんど変化がない傾向が見られる。このように、現在の状況により、進路に関する意識の変化は違ったものとなっていることが確認できる。

表3 現在の状況別進路意識不明確化スコア

	N	平均値	標準偏差	標準誤差
在職	(56)	0.48	1.41	0.19
大学	(194)	0.38	1.31	0.09
短大	(34)	-0.35	1.18	0.20
専・各・訓練	(92)	0.24	1.37	0.14
浪人	(35)	0.06	1.35	0.23
合計	(411)	0.27	1.34	0.07

$F=2.77$ $p=0.03$

それでは、重回帰分析により、進路意識の変化を規定する要因を検討しよう。分析に用いる変数は、以下である。

従属変数 進路意識不明確化スコア (-4~4)

独立変数 性別ダミー：男子=1、女子=0

現在の状況ダミー：在職、4年制大学、短大、専門・各種学校・職業訓練校のそれぞれである場合を1、それ以外を0

友人とのコミュニケーション：「先週1週間に友人と話をしたり、一緒に何かをした」頻度で「なかった」=0、「1~2日」=1.5、「3~4日」=3.5、「5日以上」=5

家族とのコミュニケーション：「先週1週間に家族と話をしたり、一緒に何かをした」頻度で「なかった」=0、「1~2日」=1.5、「3~4日」=3.5、「5日以上」=5

保護者のフリーター許容度：「働き口が減っているのしかたがない」に対する回答で「とてもそう思う」=4、「まあそう思う」=3、「あまりそう思わない」=2、「まったくそう思わない」=1

仕事での成功志向：第1次追跡調査の「仕事で成功すること」が重要かどうかに対する回答で「とても重要」=3、「少し重要」=2、「重要ではない」=1

現在志向：高校生調査と第1次追跡調査の「将来よりも今の生活を楽しみたい」に対する回答で、『あてはまる(現在志向)』から『あてはまらない(非現在志向)』に変化=-1、変化なし=0、『あてはまらない(非現在志向)』から『あてはまる(現在志向)』に変化=1

やりたい仕事志向：高校生調査と第1次追跡調査の「若いうちはやりたくない仕

事にはつきたくない」に対する回答で、『あてはまる (やりたい仕事志向)』から『あてはまらない (やりたい仕事非志向)』に変化=-1、変化なし=0、『あてはまらない (やりたい仕事非志向)』から『あてはまる (やりたい仕事志向)』に変化=1

3.4.2 分析結果 (重回帰分析)

表4は、重回帰分析の結果を示したものである。短大に在学していること (5%水準で有意) や、家族とのコミュニケーションの密度が高いこと (10%水準で有意) は、進路意識が不明確化することと負の関係があることがわかる。また、高校卒業後、現在志向へと変化すること (10%水準で有意) は、進路意識が不明確化することと正の関係があることがわかる。一方、性別、友だちとのコミュニケーション、保護者のフリーター許容度、仕事での成功志向、やりたい仕事志向は、有意な影響を与えていない。

表4 進路意識不明確化の規定要因

	B	有意確率
性別ダミー	0.01	
在職者ダミー	0.04	
4年制大学ダミー	0.08	
短大ダミー	-0.11	*
専門・各種学校、職業訓練校ダミー	0.05	
友だちとのコミュニケーション	-0.06	
家族とのコミュニケーション	-0.09	+
保護者のフリーター許容度	-0.01	
仕事での成功志向	-0.06	
現在志向	0.09	+
やりたい仕事志向	-0.04	
(定数)	B=0.92	*
N	396	
F値	1.896	*
調整済みR ²	0.024	

+:p<0.10 *:p<0.05

これらの結果をまとめると、若干繰り返しになるが、以下のことが言える。第一に、現在どのような状況にあるかによって、進路意識不明確化に違いが見られたのは、他の要因をコントロールすると、短大に在学している者で、進路が明確化しているという傾向が確認される。これは、第1次追跡調査が1年次の秋に行われており、2年制の短大では、最終年次に向け、そろそろ就職について自分がどの道に進むべきかを決断しなければならない時期であること、短大では、保育士など、職業と直結した学科も多いことなどが影響を与えているのではないかと推測できる。第二に、家族とのコミュニケーションが頻繁であるほど、進路が不明確化していない。家族は、直接あるいは間接的に、進路に関する意識に影響を与えるだろう。家族とのコミュニケーションが密であるということは、家族との関係が良好であることを意味する。つまり、家族とのコミュニケーションが密であることによって、親の考え(「働く」ということに関する意識も当然含まれる)も子どもに伝わり、子ども自身も自分の将来について考え、悩んだ

ときには、相談に乗ってもらうことにより乗り越え、将来展望が明確になって来ると言ったことがあるのではないだろうか。第三に、高校を卒業し、現代志向へと変化した者ほど、進路が不明確化している。「将来よりも今の生活を楽しみたい」ということは、将来を考えることを先送りしているともとらえることができる。10年後の目標などなく、考えることすらないのかもしれない。最後に、やりたい仕事志向に注目すると、進路不明確化に有意な影響を与えていなかった。「やりたいこと」という言葉は、フリーターが自らを語る上で重要なキーワードである（下村 2000）という。また、若者の中でもとくにフリーターとして働く者のキャリア意識を特徴付ける（安達 2004）という指摘もある。職業（進路）意識が不明確な者ほど、職業が未決定になりやすいというこれまでの知見も考え合わせると、やりたい仕事志向は、進路意識が不明確になることと正の関係があると考えられる。しかし、分析では有意ではないものの、負の関係が見られ、むしろ明確化する方向と関連が見られる。これは、これまでの知見は、既にフリーターになっている人を対象とした調査から浮かび上がってきたことであり、本稿の分析対象者は、多くが在学中の者であることに起因する可能性がある。

5. まとめ

本稿では、パネル調査のデータを使用し、進路に関する意識がどのように変化したのか／しないのか、また、その変化／無変化の背景にはどのような要因があるのかを検討した。分析の結果明らかになったことは、以下である。

まず、高校生のときに比べ、卒業後1年経った時点で、「自分の進路について今も悩んでいる」人が、20%も増加したことである。これは、他の項目と比べてもかなり多いと言える。第1次追跡調査時点の状況別に、各調査時点での、『あてはまる』と回答した人の割合を見ると、在職者、進学者ともに増加しており、違いは見られない⁽⁹⁾。

第二に、子どもの進路意識を親は把握し切れていないということが明らかになった。とくに「自分の進路について今も悩んでいる（22ポイントの差）」と「自分には10年後の目標がある（13ポイントの差）」では、開きが大きい。

第三に、高校生の時点と卒業後1年目の間の意識の変化を見ると、項目によって若干の違いはあるが、6割から7割の人では、進路意識に変化が見られない。しかし、3割から4割の人では、進路意識に変化が見られ、進路意識が不明確化する方向へと変化する者が多いことが明らかになった。

第四に、進路意識不明確化スコアで見ても、不明確化した者は39.2%、明確化した者は27.6%、変わらない者は33.1%と、不明確化した者がもっとも多いことが確認できた。

第五に、重回帰分析の結果から、短大に在学していること（5%水準で有意）や、家族とのコミュニケーションの密度が高いこと（10%水準で有意）は、進路意識が不明確化することと負の関係、高校卒業後、現在志向へと変化する事（10%水準で有意）は、正の関係があることが明らかになった。

以上のことから、高校を卒業後それぞれの進路に進み1年経ち、新しい生活環境にも適応し、将来のことを考える余裕もでき、自分のやりたい仕事を早くしぼらなければならないと感じはじめているが、どんな仕事をしたいか、10年後にどのようになりたいかが明確でなく、結果として、自分の進路について悩んでいるという、迷える若者像が浮かび上がってくる。しかし、自分の進路についてあれこれ悩むことは一概には悪いとは言えない。悩みながら職業意識

が形成されることにより、学校から仕事への移行がスムーズに行われる場合もあると考えられるからである。高校卒業後の進路意識の不明確化が、その過程のものであるのならば、大きな問題ではないのかもしれない。しかし、進路意識が不明確なままであれば、進路意識の明確化→進路活動→進路決定という流れにはのれず、進路未決定という状況に陥る可能性は否定できない。進路意識の未形成を個人の問題に帰することなく、現在さまざまな政策がとられているように、何らかの支援策も必要であろう。その際に家族の果たす役割も決して小さくないと言える。

本稿では、高校3年時点と卒業後1年目時点の間の意識の変化に注目したため、『あてはまる』で変化がない場合も『あてはまらない』で変化がない場合も、「変化なし」ということで同じに扱った。しかし、若年層の就業問題、とくに、進路未決定、学卒無業者の問題との関連で考えれば、進路に関する意識が不明確なままで変化なしの者も問題を抱えていると言えなくもない。どのような人が不明確なままなのか、また、どのような要因が影響を与え、不明確なままなのか。この点については、今後の課題としたい。

[注]

(1) 久木元 (2003) は、2000年の『労働白書』以降の若者世代やフリーターに関する調査・研究成果について、「一括して論じることは難しいが」とことわりながらも「多くに共有されていたのは、フリーターの増加を若者の「意識」の変化にすべて還元することへの警戒であった。そうではなく、若年労働市場の構造変化など。さまざまなレベルでの構造的な要因を重視する問題意識があったと考えられる。」と指摘している。

(2) 本田 (2005) では、①②③の3項目のスコアを合計したものを「進路不安」として分析に用いている。また、玄田・佐藤 (2005) では、①②③と「進路について今、真剣に考えないと困る」の4項目を「将来のキャリア観」としている。

(3) 高校生調査では、第2主成分(説明される分散は12.3%)、第1次追跡調査では、第1主成分で(説明される分散は11.8%)、この4項目の固有値が大きい。ただし、2つの調査ともに、①②③は正、④は負である。

(4) 「わからない」に対し、『あてはまらない』と回答した人を「わかる」つまり、質問文の否定形で考えることには、異論があるかもしれないが、ここでは、そう判断することにしたい。以下の項目に関しても同様に解釈することにする。

(5) 当然のことながら、分析に用いた4つの項目以外にもさまざまな要因が考えられる。

(6) 高校生調査で④と①②③の相関係数は、順に -0.501 、 -0.269 、 -0.282 、同様に卒業後1年目調査で、 -0.390 、 -0.204 、 -0.131 、同様に保護者調査で、 -0.185 、 -0.086 、 -0.052 であり、①②③の3項目に対し、肯定的意見の者では、④に対しては否定的意見をもっているというネガティブな関係がある。

(7) 「進路意識不明確化スコア」の得点が高いほど、高校時代に比べ、卒業後1年目の方が、進路意識が不明確になったことを意味する。

(8) 労働市場における状況や就職をめぐる環境の違いが、「働く」ことをめぐる意識に影響を及ぼす可能性は否定できないが、本稿で用いる変数の男女それぞれの平均値は、 0.32 、 0.23 であり、有意な差は見られなかった($P=0.502$)。よって、本稿では男女別の分析は行わない。

(9) 付表1 各調査時点の『あてはまる』と回答した人の割合

(第1次追跡調査時点における状況別) (%)

第1次追跡調査時点の状況	高校生調査	第1次追跡調査
在職	32.8	54.2
大学	42.9	64.4
短大	37.1	58.8
専・各・訓練	21.1	42.6
浪人	51.4	51.4
合計	36.8	56.5

[参考文献]

- 天野郁夫 2005 「リカレント化する社会の高等教育は」『日本労働研究雑誌』No. 542 : 1 頁。
- 東清和・安達智子編著 2003 『大学生の職業意識 最近の調査データから』学文社。
- 玄田有史 2001 『仕事の中の曖昧な不安—揺れる若者の現在』中央公論新社。
- 玄田有史・佐藤香 2005 「将来の人生設計に関する高校生の意識」佐藤博樹編『厚生労働科学研究費補助金製作科学推進事業 若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証分析 平成16年度 総括研究報告書』37~46 頁。
- 原ひろみ 2005 「新規学卒者労働市場の現状—企業の採用行動から」『日本労働研究雑誌』No. 542 : 4~17 頁。
- 本田由紀 2005 「高校生の「対人能力」の規定要因と帰結」佐藤博樹編『厚生労働科学研究費補助金製作科学推進事業 若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証分析 平成16年度 総括研究報告書』67~79 頁。
- 小杉礼子 2004 「若年無業者増加の実態と背景—学校から職業生活への移行の隘路としての無業の検討」『日本労働研究雑誌』No. 533 : 4~16 頁。
- 久木元真吾 2003 「「やりたいこと」という論理—フリーターの語りとその意図せざる帰結」『ソシオロジ』第48巻第2号 : 73-89 頁。
- 佐藤博樹・高橋康二 2005 「労働のセーフティネットを使いこなすためには何が必要か—労働者の権利に関する理解に注目して—」佐藤博樹編『厚生労働科学研究費補助金製作科学推進事業 若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証分析 平成16年度 総括研究報告書』47~66 頁。
- 下村英雄 2000 「フリーターの職業意識」日本労働研究機構、70~85 頁。
- 下村英雄 2002 「第四章 フリーターの職業意識とその形成過程—やりたいこと志向の虚実」小杉礼子編著『自由の代償／フリーター—現代若者の就業行動と意識—』日本労働研究機構。
- 下村英雄 2003 「調査研究からみたフリーター—フリーターの働き方と職業意識」後藤宋理・大野木裕明編『現代のエスプリ No. 427 フリーター その心理社会的意味』至文堂、32~44 頁。
- 筒井美紀 2005 「高卒就職の認識社会学—「質の内実」が「伝わる」ことの難しさ」『日本労働研究雑誌』No. 542 : 18~28 頁。

高卒者と保護者が共有する価値観

——親友と好きなことを楽しむ時間・人の役に立つこと——

深堀聰子

(京都女子大学短期大学部)

高校生調査より明らかになった、仕事での成功をあまり重視せず、親友と好きなことを楽しむ時間をもつことや、人の役に立つことなどを重視する高校生の価値観は、高校卒業後どのように変容したのだろうか。本稿では、高校生調査、第1次追跡調査、保護者調査、NELS 第3次追跡調査データの比較より、高卒者が高校3年時の価値観を基本的に維持しており、保護者とも価値観の多くを共有していることを明らかにした。一方、高卒者の価値観には、見過ごせない変化も生じている。就職者の間では、仕事で成功することや人の役に立つことを重視する傾向が弱まっている。進学者の間では、よい教育を受けることを重視する傾向が強まっているが、親友と好きなことを楽しむことを重視する傾向は弱まっている。高卒者の価値観の規定要因の分析からは、人の役に立つことを重視する価値観の形成に最も強い規定力をもつのは、所得や進路ではなく、保護者の価値観であることが明らかになった。

1. はじめに

1.1. 高校生の価値観—日米比較より

高校がかつての求心力を失い、高校生の生活と意識に対する影響力を弱めるなかで、高校を支えてきた教育達成による地位達成というメリトクラシーの原理を、高校生は必ずしも支持しなくなっている(樋田・耳塚・岩木・荻谷編、2000年；尾嶋編、2001年)。高等教育の大衆化と少子化による大学入試の易化、雇用の流動化と若年労働市場の縮小等によって、メリトクラティックな競争構造が自明ではなくなるなかで、高校生はいかなる価値形成をしていけばよいのか。この若年パネル・プロジェクト平成16年度総括研究報告書の論文「高校生の生活と意識—日米比較」(深堀、2005年)では、日本と同様に、メリトクラシーを重要な社会原理として尊重してきたアメリカの高校生の生活と意識に注目し、日本の合わせ鏡として検討することによって、この問いに答える糸口を探った。

若年パネル高校生調査(高校3年生対象)とアメリカ連邦教育省・国立教育統計センター(NCES)のNELS第2次追跡調査(全米の第12学年対象)(NCES, 2002)の比較研究より明らかになった、日本の高校生の特徴のうち、ここでは次の4点に注目する。第1に、高校生の価値観を図1に示す13の価値項目^①で捉えた場合、それぞれの価値項目は、「家庭重視」「社会貢献」「地位達成」「自己充足」とも呼ぶべき価値因子との相関関係の相対的な強さにもとづいて、4つの価値グループに分類(付表2参照)することが出来る。そして、日本の高校生の間でも、アメリカの高校生の間でも極めて高い比率で重視されているのが、「親友をもつ」(「とても重要」と回答した比率:日本85.0%、米国79.7%、以下同様)、「好きなことを楽しむ時間をもつ」(78.4%、64.2%)といった「自己充足」型の価値項目と、「結婚して幸せな家庭生活をおくる」(66.4%、79.6%)といった「家庭重視」型の価値項目であった。日米の高校生の大多数が、親友との楽しい時間を重んじ、配偶者との幸せな家庭生活を夢見ている。

第2に、「社会貢献」型の価値では、「子どもには自分よりも恵まれた条件を与える」(40.6%、

76.5%) ことを重視する高校生が、アメリカでは日本の2倍近く存在する一方で、「人の役に立つこと」(68.5%、33.3%)を重視する高校生は、日本では7割近く存在し、3割のアメリカを大きく上回っている。「人の役に立つこと」は、「親友をもつこと」と「好きなことを楽しむ時間をもつこと」に次いで、3番目に多くの日本の高校生によって重視されている価値項目であり、日本人に特徴的な価値観として注目する必要がある。

第3に、「仕事で成功」(53.3%、88.1%)したり、「仕事で人に尊敬」(45.5%、66.7%)されたりすることを重視する「地位達成」型の価値を重視する高校生は、アメリカでは多数派であるのに対して、日本では半数程度しか存在しない。さらに、教育達成による地位達成といったメリトクラシーの原理を構成する価値項目とみなすことのできる「よい教育を受けること」(31.5%、84.6%)は、アメリカとは対照的に、日本の高校生によってあまり支持されていない。しかも「よい教育を受けること」は、「地位達成」因子よりも「社会貢献」因子と強い相関を示していることから(付表2参照)、日本の高校生にとって教育は、自己の社会的成功のためというよりも、社会の改善のために受けるものとしての意味合いをもっていることがわかる。したがって日本の高校生の地位達成志向は、アメリカの高校生と比較すると、確かに希薄であるといえる。

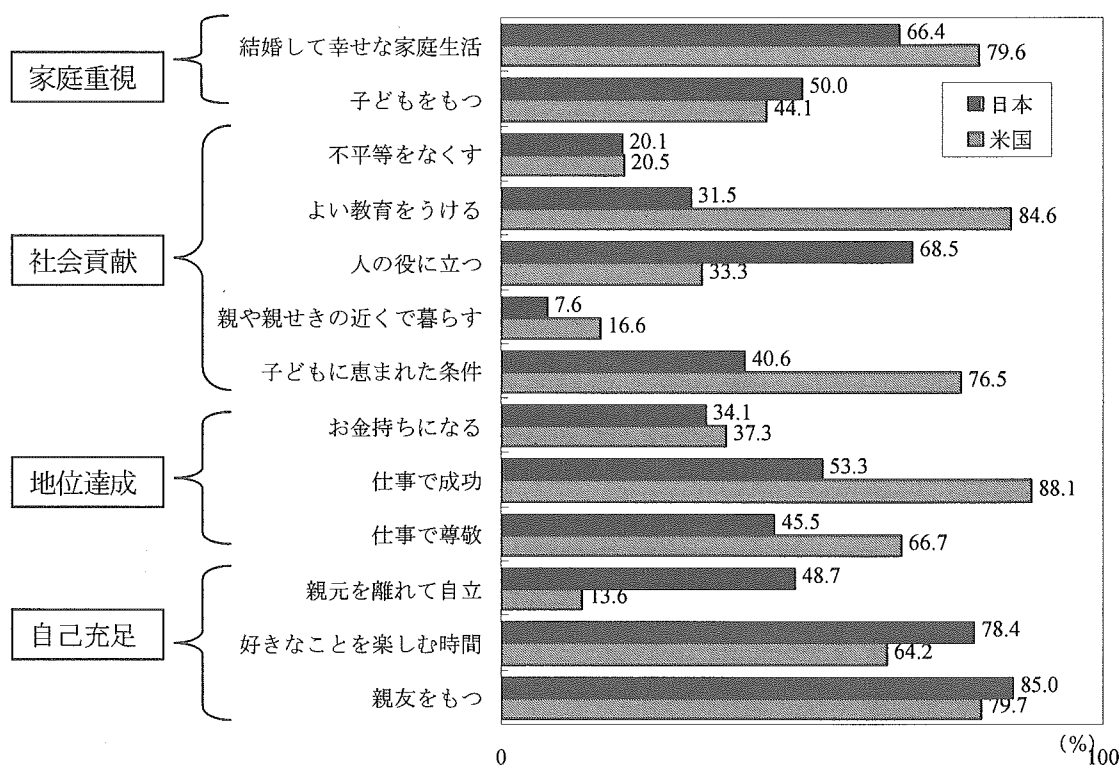


図1 日米の高校生が重視する価値(「とても重要」と回答した比率)

第4に、日本の高校生によってとくに重視されている「親友をもつこと」「好きなことを楽しむ時間をもつこと」「人の役に立つこと」といった3つの価値項目、および「仕事で成功すること」「よい教育を受けること」といったメリトクラシーの原理に関わる2つの価値項目が、だれによって支持されているのかを学科別(普通科上位・普通科下位・専門学科)および性別に検討してみると、以下の点が明らかになった。「親友をもつこと」「好きなことを楽しむ時間をもつこと」「人の役に立つこと」を重視する傾向は、いずれも在籍学科に関わらず、とりわけ女子

の間で強い (いずれも $p < .001$)。また「仕事で成功すること」は、女子よりも男子によって ($p < .001$)、男子のなかでは専門学科、女子のなかでは普通科上位の生徒によって有意 ($p < .01$) に重視されている。一方、「よい教育を受けること」は、男女を問わず、普通科上位の生徒によって有意 ($p < .001$) に重視されている。

1.2. 課題の設定

若年パネル高校生調査と NELS 第 2 次追跡調査の比較研究より、日本の高校生の地位達成志向は希薄であり、むしろ親友と好きなことを楽しむ時間をもつことや、人の役に立つことを重視していることが明らかになった。こうした日本の高校生の価値観は、高校卒業後、就職や進学といった新たな進路を辿るなかで、どのように変化していくのだろうか。成人期を迎えようとしている高卒者の価値観は、保護者の価値観とどれほどの共通性をもっているのだろうか。またいかなる要因が、高卒者の価値観に差異をもたらしているのだろうか。

ここでは、若年パネル第 1 次追跡調査および保護者調査に含まれている高校生調査と同じ 13 の価値項目に注目し、高校 3 年時と高卒 1 年目の回答を比較したり、保護者の回答の特徴を明らかにすることを通して、これらの問いに対する答えを導きたい。さらに「人の役に立つこと」を重視する日本人の特徴に注目し、どのような条件が、人の役に立つことを重視する価値観の形成に寄与しているのかを明らかにすることをめざす。

1.3. データについて

本稿の分析では、若年パネル高校生調査 (高校 3 年生)、第 1 次追跡調査 (高卒者)、および保護者調査のデータを結合したデータセットを用いる。追跡調査は、必然的にサンプル・バイアスの問題を伴うが、本サンプルの偏りについては、本報告書の前章において詳細に分析されているため、ここではとくに留意すべき偏りとして、女性がやや多く、私立高校出身者と四年制大学進学者が有意に多い点を指摘しておきたい。

さらに本稿では、若年パネル高校生調査と第 1 次追跡調査で採用されている 13 の価値項目のうち、4 つを含む NELS 第 3 次追跡調査のデータも用いる。第 3 次追跡調査は、高校卒業後 2 年目に実施された調査であるため、時期的なズレの問題があるものの、高校生の高校卒業後の価値観の変化を比較する上で一定の示唆を与える。第 3 次追跡調査は、全米を代表する 1052 校の中等学校より無作為に抽出された第 8 学年生徒 24, 599 人を基本年 (1988 年) サンプルとして、第 1 次 (1990 年)、第 2 次 (1992 年) 追跡調査に引き続き実施された 3 度目の追跡調査 (1994 年) である。第 3 次追跡調査のサンプルは、第 2 次追跡調査のサンプルを層化抽出法を用いて縮小して得られた 15, 964 人から構成されるが、本分析で用いるのは、そのうち第 4 次追跡調査 (2000 年) の対象にもなった 12, 144 人のサブサンプルについて、1992 年の第 12 学年を代表するように重み付けを行ったデータである⁽²⁾。したがって、ここでは NELS 第 3 次追跡調査データにおけるサンプル・バイアスの問題は克服されているとみなす。

2. 高卒者の価値観

2.1. 日米の高卒者—拡大する地位達成志向の格差

日本の高校生の高校卒業後の価値観の変化の分析に入る前に、日米の高卒者の価値観の特徴を、可能な範囲で比較しておこう。NELS 第 3 次追跡調査には、若年パネル調査に含まれる 13

の価値項目と共通の「子どもには自分よりも恵まれた条件を与えること」「お金持ちになること」「仕事で成功すること」「親友をもつこと」の4つが含まれている。日米の高卒者は、これらの価値項目をどの程度重要と考え、その考えは高校3年生（第12学年）の時期と比べて、どのように変化したのだろうか。

まず図1と図2を比較すると、「親友をもつこと」（高3→高卒：日本 85.0%→85.0%、米国 79.7%→85.8%、以下同様）は、高3時と同様に、日米の高卒者の大多数によって支持されていることがわかる。親友との交流を重視するのは、日米の高卒者に共通する価値観といえる。

ところが、「仕事で成功すること」（53.3%→46.3%、88.1%→89.4%）や、「お金持ちになること」（34.1%→26.4%、37.3%→38.4%）では、日本の高卒者の地位達成志向がいつそう低下しており、その結果として日米の差異が拡大していることがわかる。これは若年パネル高校生調査において「仕事で成功すること」を重視していた男子・専門学科の高校生の価値観が、前述した女子と4年制大学進学者の比率が高い追跡調査データのサンプル・バイアスの問題によって過小評価されていることに起因すると推察することも出来る。いずれにせよ、全体としては日米の高校生の地位達成志向に大きな隔たりがあるといえる。

最後に、「子どもには自分よりも恵まれた条件を与えること」（40.6%→30.1%、76.5%→91.2%）を重視する傾向は、アメリカでは強まり、日本では弱まっている。

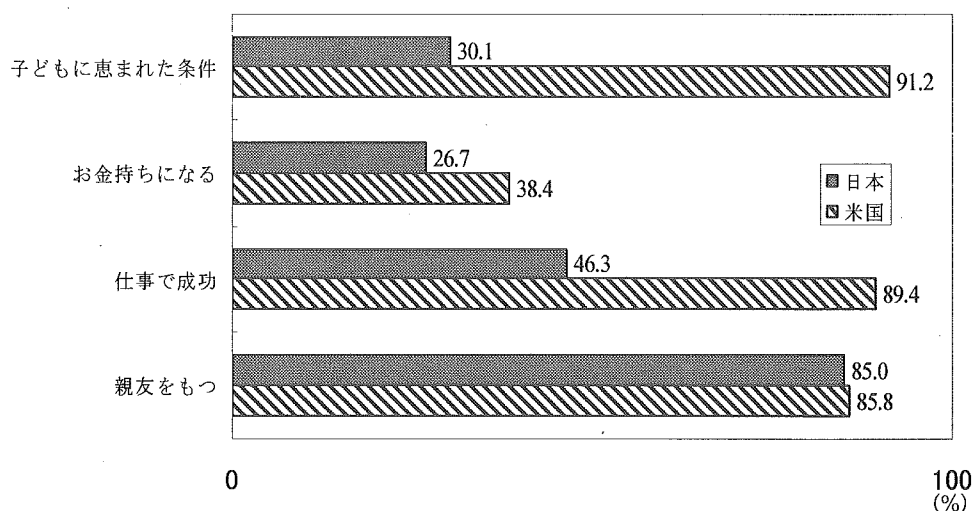


図2 日米の高卒者が重視する価値（「とても重要」と回答した比率）

2.2. 変わらない価値観—①親友、②好きなことを楽しむ、③人の役に立つ

日本の高校生の価値観は、高校卒業後、就職や進学といった異なる進路を迎えるなかで、どのように変化したのだろうか。図3は、高卒者が高校3年時と高校卒業後1年目に、13の価値項目について「とても重要」と回答した比率を示している。

まず図1と図3における価値グループの構成の変化に注目してみよう。前述したとおり、価値グループは、因子分析の手法を用いて、13の価値項目を各価値因子との相関関係の相対的な強さにもとづいて分類した結果である（付表3参照）。高校3年時には「社会貢献」因子と最も強い相関を示していた「よい教育をうける」という価値項目は、高卒1年目には「地位達成」因子と最も強い相関をもつようになっている。高校3年生にとって教育を受ける目的は、自己

の社会的成功よりも、社会の改善のためという意味合いをもっていたが、社会人や大学生となった高卒者にとって、その意味合いが逆転したのである。

さらに高校3年時には「社会貢献」因子と最も強い相関を示していた「親や親戚の近くで暮らすこと」や「子どもには自分よりも恵まれた条件を与えること」といった価値項目は、高卒1年目には「家庭重視」因子と最も強い相関を示すようになってきている。このことは、社会貢献の範囲に「社会」「人」といった他者だけでなく、「親」「子ども」などの家族も含めて認識していた高校生が、公私をより明確に区別するようになったことを示唆している。

つぎに、図3より、高校3年時と同様に高校卒業後1年目にも、高卒者に重視されている価値項目のトップ3は、「親友をもつこと」(85.0%→85.0%)、「好きなことを楽しむ時間をもつこと」(78.4%→72.7%)、および「人の役に立つこと」(68.5%→67.2%)であることがわかる。

「結婚して幸せな家庭生活をおくる」(66.4%→61.6%) ことも、依然として高い水準で支持されている。逆に、「仕事で成功すること」(53.3%→46.3%)や「仕事で人に尊敬されること」(45.5%→42.7%)といった「地位達成」型の価値項目を重視する高卒者は半数以下にとどまっている。このように、高校生と高卒者の回答は概ね一致していることより、高校生の価値観は、高校卒業後も基本的に強い連続性をもって維持されているということが出来る。

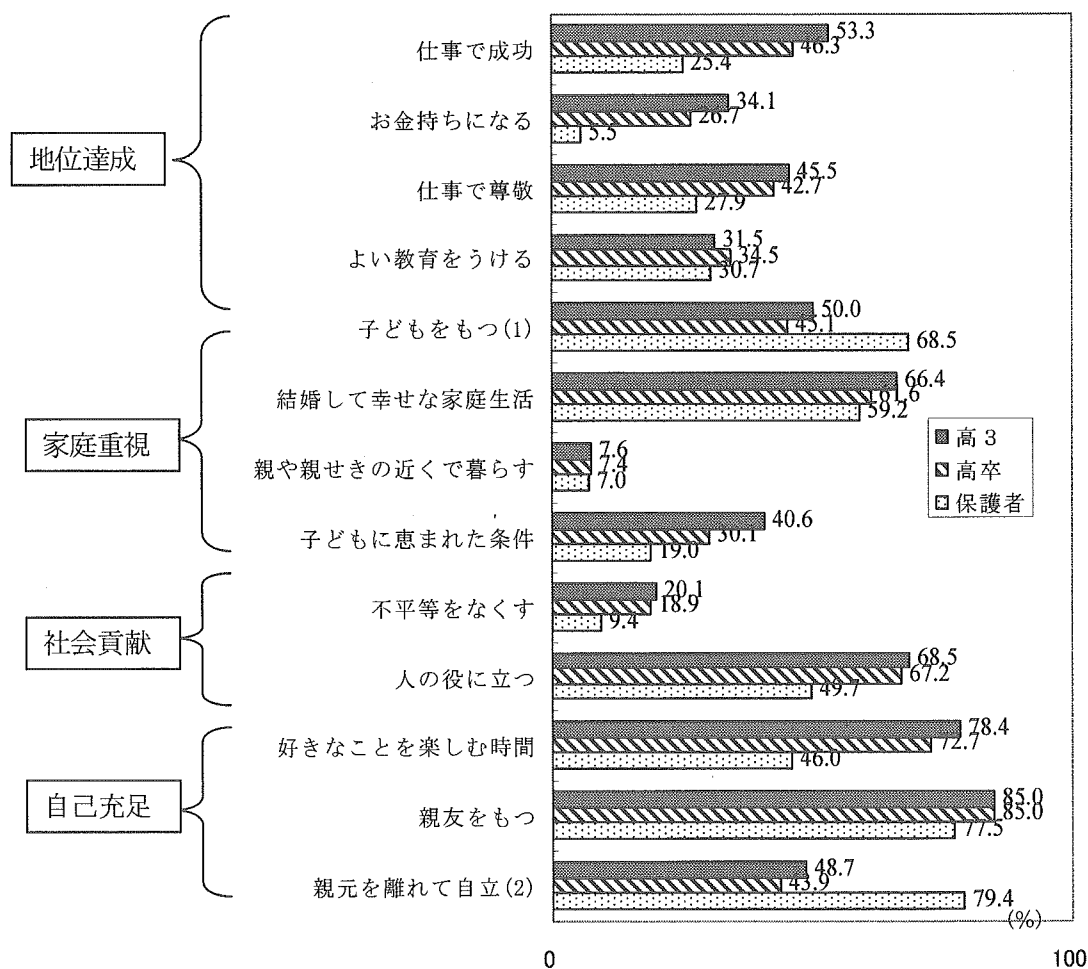


図3 高卒者と保護者が重視する価値（「とても重要」と回答した比率）

(1) 保護者調査では、「子どもを育てる」。

(2) 保護者調査では、「子どもが自立できるようにする」。

一方、図3の「高3」と「高卒」の比率を比較してみると、「とても重要」と回答する比率が全体的に減少しているなかで、「よい教育をうける」(31.5%→34.5%)だけが増加していることがわかる。このことは、前述した価値構造における変化とあいまって、教育をうけることが、一部の高卒者にとって新たに重視されるようになってきていることを示唆している。

2.3. 価値観の変化と差異—進路別・性別の分析

表1は、高卒者(高校3年時および高卒後1年目)の価値項目の平均値を、進路別、性別に整理したものである。平均値とは、各価値項目について、「とても重要」「少し重要」「重要ではない」の回答結果に2~0点のスコアを与えて算出した値である。なお表2は、高卒者の価値項目の平均値が、高校3年時から高校卒業後1年目にかけて有意に変化したのか(「高3時→高卒後」欄)、就職者と進学者(「就職者⇔進学者」欄)、男女(男子⇔女子)の間で有意に異なるのかを調べるために行ったT検定の結果である。表1と表2を比較検討することによって、高校生の価値観が卒業後どのように変化したのかについて、「とても重要」だけでなく「少し重要」「重要ではない」の回答も反映する、進路と性別を考慮した知見を得ることが出来る。

表1 高卒者と価値観〔平均値〕(高校3年時・高卒後1年目、進路別・性別)

	合計		就職者		進学者		男子		女子	
	高3時	高卒後	高3時	高卒後	高3時	高卒後	高3時	高卒後	高3時	高卒後
仕事で成功	1.47	1.41	1.47	1.11	1.47	1.45	1.51	1.49	1.44	1.35
お金持ちになる	1.10	1.08	1.13	1.17	1.09	1.06	1.12	1.08	1.07	1.07
仕事で尊敬	1.35	1.31	1.39	1.26	1.34	1.32	1.38	1.37	1.33	1.26
よい教育をうける	1.14	1.21	1.02	0.98	1.16	1.24	1.17	1.26	1.12	1.17
子どもをもつ	1.31	1.31	1.25	1.27	1.32	1.32	1.36	1.27	1.28	1.35
結婚して幸せな家庭生活	1.53	1.52	1.49	1.51	1.54	1.52	1.60	1.49	1.48	1.55
親や親せきの近くで暮らす	0.56	0.57	0.59	0.51	0.55	0.58	0.53	0.51	0.58	0.61
子どもに恵まれた条件	1.23	1.07	1.41	1.06	1.21	1.07	1.33	1.04	1.17	1.09
不平等をなくす	1.02	0.95	1.03	0.92	1.03	0.96	1.05	0.98	1.01	0.93
人の役に立つ	1.68	1.65	1.75	1.56	1.67	1.66	1.64	1.59	1.72	1.69
好きなことを楽しむ時間	1.84	1.72	1.79	1.75	1.84	1.71	1.81	1.66	1.86	1.76
親友をもつ	1.87	1.83	1.89	1.83	1.88	1.83	1.84	1.77	1.91	1.87
親元を離れて自立	1.46	1.34	1.48	1.29	1.46	1.34	1.52	1.31	1.42	1.36
N	471		63		408		202		269	